

「柿の木坂」

毎年10月、高柳町^{とちがはら}栢ヶ原地区と同町^{うるししま}漆島地区を会場に「狐の夜祭り」が開催される。栢ヶ原神社で狐の好物とされる巨大な油揚げ（畳一枚分）を揚げ、狐に扮した参加者がそれを担ぎながら、提灯の灯りを頼りに約3km先の麓の漆島地区まで行列で歩く。行列は途中で左折して山道を下るが、その先に「藤五郎狐」という民話に出てくる柿の木坂がある。かつては栢ヶ原住民の生活道路であり、中学校への通学路としても使われていた。

昔々のその昔、栢ヶ原の柿の木坂に、1匹の古狐が住んでいた。ときどき人を化かしたりするので、村人たちから恐れられていた。

この村の庄屋で「おまえ」という家に、藤五郎という若者がいた。ある日の夕方、藤五郎は鉄鍋を出したり一反木綿を出したりしていたが、やがてそれを持って柿の木坂へ出かけて行った。

藤五郎は「おらばさ（うちのおばあさん）はお寺参りに行ったんだが、馬鹿遅くならんばいいが。」と、わざと大声で言った。するとしばらくして、「おお、藤五郎だがや。迎えに来てくれたかや。」と、老婆そっくりに化けた狐が、杖をつきながら柿の木坂を登ってきた。「くたびれたろう。おらにばれらっしゃい（おんぶされなさい）。」藤五郎は用意してきた一反木綿を帯にして、狐を背中にぐるぐる縛りつけて歩き出した。

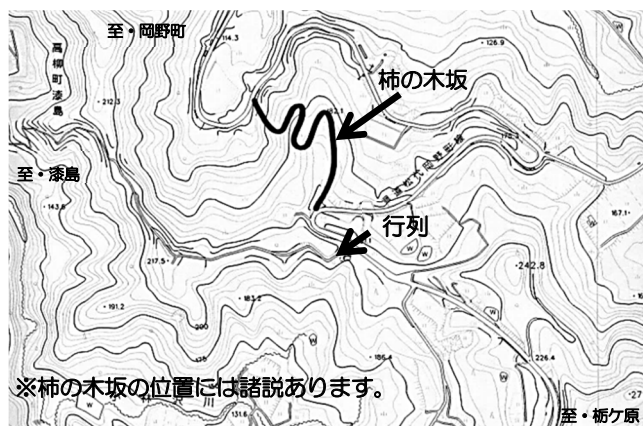
村が近くなると背中の狐が動き出すので、頭に鉄鍋をかぶって攻撃に備えた。狐はなんとか逃れ



狐の夜祭り（狐の提灯行列）の様子

坂さんぽ

⑮



柏崎市発行5千分の1国土基本図Ⅷ-FE53平成19年測量に加筆

ようとして「おらぁ小便が出たくなった。」と言うと、藤五郎は「ばれててこかつしゃい（おんぶされたまま出しなさい）。」と返す。「こんだぁあっぱ（大便）がしたくなつてば。」と言うと、「もうちっとで家に着くすけ、我慢さっしゃい。」と返す。

家の敷居をまたぐと、藤五郎は大声でどなった。「今日こそ狐をつかまえてきたぞ。それ、火を焚け。」庭の土間から屋根裏まで続く大梯子に縛りつけ、下からどんどん火を焚くと、狐は大きな尻尾を出し、罪を詫びて許しを乞うた。そのうち繩に火がついて土間にどうと落ちると、狐は「この恨みでおまえの家は、3年がうちに絶やしてやるぞ。」と悪態をつきながら逃げ出し、村はずれで命を落とした。その後3年、破竹の勢いで栄えていた「おまえ」の家は急速に没落したという。

この民話に着想を得て、平成元（1989）年から始まった「狐の夜祭り」は、今年の10月7日で30回目を迎える。「歩いた人から、きつねの気分」をうたい文句に、主催者と参加者が力を合わせて手作りで開催してきた。提灯の光の帯がゆらゆらと山道を下る様子は、とても幻想的である。

●参考にした本

『柳郷の伝説 小さな村の物語（高柳）』春日義一編著（388 カス）

●高柳町事務所及び狐の夜祭り実行委員会の方々、柏崎市役所の関係職員の方々には大変お世話になりました。ありがとうございました。